

深い淵から御腕の中へ（2026年8月19日）

私たちの力では深い^{ふち}淵から抜け出せません。しかし、神様は私たちに御手を差し伸べてくださいます。「主のもとに慈しみがあり／そのもとに豊かな贖いがある」からです（詩130: 7 一部）。

「前をよく見て歩いていなかった一人の若者がいました。彼は、深さ数メートルもある貯水槽に落ちてしまいました。」ヘルゲ・ムチュラー主使徒は、2026年7月5日にコンゴ民主共和国のカナンガで行われた礼拝でこの話を取り上げました。その若者は中から出ようとしてましたが、滑って出られません。そこで彼は助けを求めて叫びました。〔主使徒による説教の要約〕

深淵からの叫び

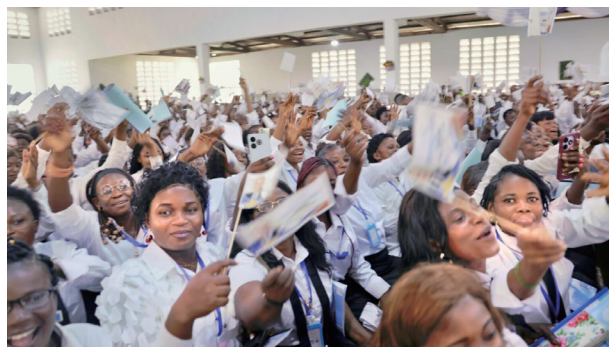
詩編の著者もこれとほぼ同じ経験をしました。どこか深い穴の中から出ようとしても出られません。しかし、正しいことを一つだけしました。叫んだのです。——「主よ、深い淵の底からあなたに叫びます」（詩130: 1）。

この詩編の著者にとって問題なのは、自分は罪人であり、いくら努力しても自分の力ではこの穴から抜け出せないことを、痛いほど理解せざるを得ない状況だったということです。しかしここで、今回の聖句が登場します。「主のもとに慈しみがあり／そのもとに豊かな贖いがある。」

どん底にいても

今回の聖句が私たちとどう関係があるのでしょうか。とても簡単です。私自身も、そして皆さん全員も罪人で、深い穴の中にいるということです。

第一の戒めを一度確認するだけで十分です。「私はあなたの主なる神である。私のほかに神があってはならない」となっていますね。すると今度は自



らにこう問いかける必要があります。「ここ数週間、数ヶ月の間、本当に神様を絶対的な最優先にしていたでしょうか。」もししていなければ、私たちも罪人ということになります。

叫ぶ、ただし正しい方法で

紛れもない事実として、私たちは深い穴の中にいて、そこから自分の力で出ることができません。しかし、井の中の蛙のようになってはいけません。罪と妥協してはならず、他人のせいにして被害者意識を持つてはいけません。

全能の主に向かって叫べばよいのです。主なる神様は耳を傾けてくださいます。皆さんのことをしっかり心に掛けてくださいます。だからといって、ただ助けを求めて叫ぶだけで終わってはいけません。隠れるのではなく、イエス・キリストの御前に出て、心を開いて「私は罪人です。どうかお赦してください」と伝えましょう。

そうすれば——そうすることによってはじめて——皆さんは愛に満ち、恵みに満ち、赦しに満ちた神様の御前に立つことになるのです。

神は耳を傾け、助けに来られる

陰府^{よみ}の世界には、深い穴——牢獄——に留め置かれ、自分ではどうすることもできない魂がたくさんいます。神様は、こうした魂の声にも耳を傾けてくださいます。こうした多くの魂のことも神様は気にかけてくださいます。彼らも、神様にとって大切な存在なのです。

この神様が罰する神だなんて、誰が皆さんに言ったんですか。それは真実ではありません。憐れみ

と赦しの神です。その御心は実に広く、かつてこの世に生きたすべての魂を受け入れてくださるのです。

変わることはできます。神様の御腕は開かれています。そして私たちは、陰府にいる兄弟姉妹と共に待つことができます。詩編 130 編 6 節がまさに言い表しているように、夜回りが朝を、夜回りが朝を待つにも増して、私たちの主を待ち望むのです。

ナックトゥデイ

新使徒教会国際本部発行

原著 Andreas Rother

写真 コンゴ民主共和国南東部教区

日本語訳発行 〒 206-0014 東京都多摩市乞田 1320 日本新使徒教会
(042)374-0070